

(2) 文化財を有する市町村にある学校における地学協働モデル（白老東高校の実践から）

①高校の状況

白老町は、人口 15,697 人（令和 5 年 1 月 31 日現在）で、令和 2 年にオープンした「ウポポイ（民族共生象徴空間）」や国指定の史跡である「仙台藩白老元陣屋資料館」があるなど、教育資源として、魅力ある文化財を有しているのが特徴的である。

町には、昭和 62 年に開校した道立の白老東高校と昭和 39 年北海道日本大学高等学校として創立した私立の北海道栄高校の 2 つの高校があり、人口規模に対して高校数は多い。加えて、苫小牧市、登別市、室蘭市への通学利便地域であることや地域の子供の数の減少、令和 2 年から私立高校就学への国や道による支援金が大幅に拡充したことの影響を受け、白老東高校の生徒数が急減している状況がある。そのため、高校の存在意義を出すためにも、特色ある高校づくり、学校の魅力化が求められている。

このように、当別高校同様、町外から入学してくる生徒が多い状況（町内出身者は約 3 割）であり、白老町特有の「文化財」という魅力を知らずに高校生活を送る生徒も多い。「文化財」は、教育資源としてだけでなく、観光資源でもあることから、まちの活性化にも活かせる素材であり、町外から入学してくる「地域の文化財を知らない」生徒が「地域の文化財」についても探究していく事例として、本事例が参考になると考える。

白老東高校は、本事業の前身である「高等学校 OPEN プロジェクト」の研究指定校でもあり、そのころから「地域学」の取組を進めている実績があった。このため、町や町教育委員会との連携はあったが、生徒の地域学習を目的とした活動にとどまり、「地域の活性化や地域課題の解決に向かう活動」や「生徒の主体性による『探究』の活動」には到っていなかった。

生徒の主体的な活動を進めるための多様な地域の人材や、教育資源とつながるためには、地域 Co が関わり、総合的な探究の時間のカリキュラム作成を進める必要もあった。地域学の素地があっても、本格的に探究を進めるには、既存の狭いつながりだけでは難しいところがある。

また、地域の白老東高校に対する理解については、町外出身の生徒が多いことや地域住民が直接的に活動に関わるのが少なかったため、あまり理解されていないという状況であった。高校としては、町内からの入学者を増やすためにも、地域の認知度や理解度を上げていく必要がある。こうした中での地学協働の推進は、地域の意識変化に効果が期待できる取組であることから、学校（管理職）の課題解決に関わる重要な取組としてスタートしていた。

②研究の概要

<事業ポンチ絵>

北海道白老東高等学校 「北海道CLASSプロジェクト(地域協働活動推進実証事業)」研究概要

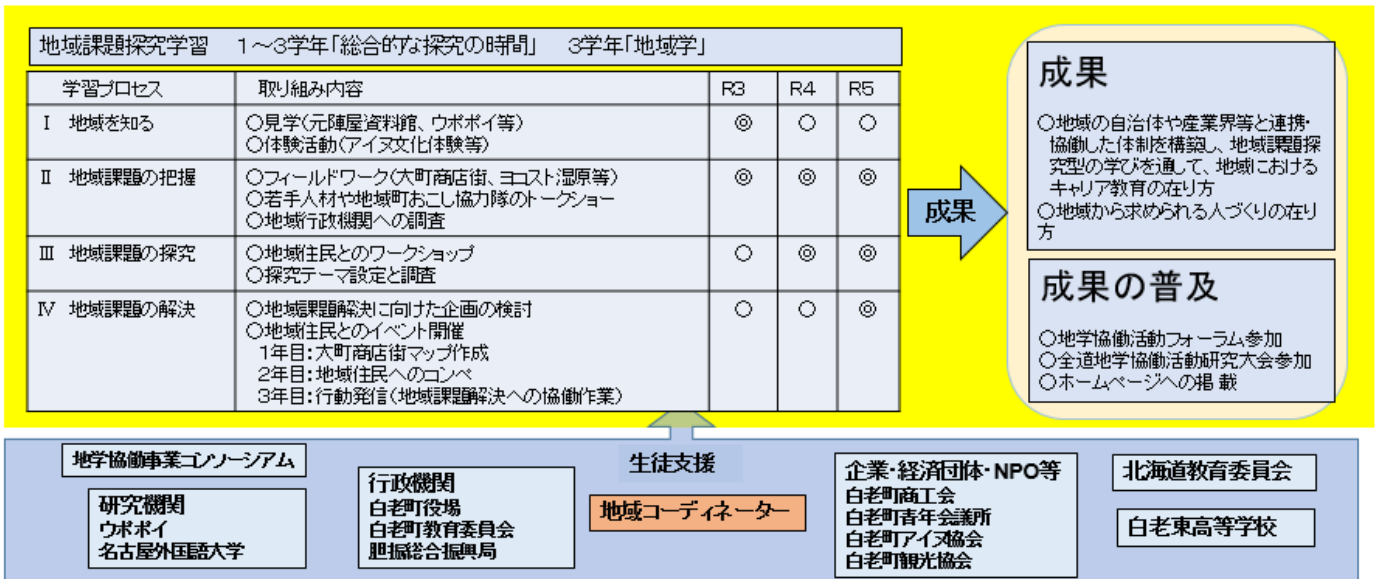
研究テーマ 「地域課題探究型カリキュラムの研究開発」

地域の魅力や地域課題を認識し、地域の郷土愛の醸成

地域課題解決に向けた探究活動と行動発信

研究仮説

- 地域の課題を共有し、自ら解決方法を考える学習や、情報発信する取組を通して、地域への愛着が深まり、地元への就職希望者が増加し、地域に貢献しようとする人材が育つだろう。
- アイヌ文化への理解や興味を深め、その魅力に気づかせることにより、アイヌ文化を尊重し、未来に伝承していきたいと思う生徒が育つだろう。
- 民族共生について考察させることにより、多様な文化や考えを持つ人を受け入れられる人材が育つだろう。
- 課題探究や情報発信の企画をグループで協力して進めることで、他者と協働して課題を追究したり解決したりする学びの力が身に付くだろう。
- 学んだ知識を活用し、課題を探究したり情報発信の方法を考えさせたりする中で、生徒の創造性や主体性が育つだろう。
- 自分たちで情報発信したり、地域に貢献したりする体験を通し、自己肯定感や自己有用感が育つだろう。
- 地域の教育資源を活用し、生徒が主体的に学ぶ学習活動の推進を通して、本校の目標とする生徒の資質・能力が育成できるだろう。



【令和3年度 地域課題解決テーマ】

- 大町商店街マップ（紹介映像）作成【名古屋外国語大学との連携】
- アイヌ文化紹介映像資料の作成（白老町生対象）【ウポボイとの連携】

(北海道 CLASS プロジェクト 北海道白老東高校)

白老東高校の CLASS プロジェクトは、今まで積み上げてきた「地域学」の素地を活かして、元陣屋資料館やウポボイなどの「探究」を行うことから、研究テーマを「地域課題探究型カリキュラムの研究開発」として、

- ・地域の魅力や地域課題を認識し、地域の郷土愛の醸成
- ・地域課題解決に向けた探究活動と行動発信

の2点を主な視点として取組を進めていくこととしている。

つまり、本事業に期待する成果は、生徒・地域が次のように変容することである。

対象	期待される変容
生徒	<ul style="list-style-type: none"> ・地域への愛着が高まり、地元で貢献したいと思う ・実社会との関わりを認識し、行動を変容させる ・アイヌ文化・民族共生の理解を深める
地域	<ul style="list-style-type: none"> ・町内の高校への関心を高め、町内からの入学者が増加する ・高校生から刺激を受け、地域が活性化する

「白老町にある高校で学んだ」ということが生徒の人生におけるアイデンティティにつながることから、生徒に期待される変容を地域への愛着・貢献への意識・アイヌ文化や民族共生への理解としていることが大きな特色となっている。これは、地域の特色としての文化財を一つの柱に活動を展開していくことを想定しているということを表しており、地学協働により、生徒が「白老町」への理解を深めるとともに、地域も高校（生徒）への理解を深めていく、双方向性の「協働」が目標達成のカギとなる。こうした目標達成に向けたカリキュラム編成を進めていくことが研究テーマとなっている。

本事業開始時の到達目標やそのための取組は、次のとおりである。

月	取 組
1 年次 (R3)	(目標) ・地域の良さや魅力に気付く ・地域の課題を把握する (主な取組) ・見学（ウポポイ、元陣屋資料館など） ・体験学習（ムックリ製作体験などアイヌ文化体験） ・フィールドワーク（商店街での聞き取り） ・地域の方々との対話交流会 (検証の項目) ※定量及び定性 ・アンケート（選択式・記述式）による地域に対する意識の変化
2 年次 (R4)	(目標) ・地域の課題を把握する ・地域の課題を探究する (主な取組) ・フィールドワーク ・町役場の各課職員との対話による地域課題の把握、探究 ・地域の各産業の方々との対話による地域課題の把握、探究 ・地域のガイド体験 (検証の項目) ※定量及び定性 ・アンケート（選択式・記述式）による地域に対する意識の変化
3 年次 (R5)	(目標) ・地域の課題を探究する ・地域の課題を解決する (主な取組) ・アイヌ文化を紹介する動画作成 ・地域の P R 動画の作成 ・地域のガイド活動 ・役場職員や地域住民に向けた発表会 (検証の項目) ※定量及び定性 ・アンケート（選択式・記述式）による地域に対する意識の変化

(令和3年度北海道 CLASS プロジェクト実施計画書 北海道白老東高校)

上記は、本事業開始当初の想定であり、実際は、進めていく中で各年次の目標や取組は変わっている。当初予定から変更した、より具体的な内容は、資料に各年次の計画書・報告書があるので、参考にしてほしいが、特に3年次開始時の計画書の目標が特徴的なので次に掲載する。上記、初年度のものとは見比べてほしい。

月	取 組
3年次 (R5)	<p>(目標)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地学協働の取組を選択科目による一部の生徒を対象としたものから、すべての生徒を対象に全教員で3年間継続して取り組む校内体制を構築する。 ・コーディネーターが授業の企画や計画段階から参画することで、本校の教育目標を実現するチームの一員として機能する。 ・コーディネーター配置終了に向け校内委員会を発足させるとともに、コンソーシアムが各学習プログラムを実効的バックアップできる体制づくりに向け道筋をつける。 ・課外活動（特に仙台藩白老元陣屋資料館における解説活動）において生徒、地域双方にとってどのような効果やメリットがあるかを検証する。 <p>(主な取組予定)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校全体で継続的に地学協働を推進する体制をめざすため、「地学協働推進委員会」を新たに組織する。 ・3年間を見通した探究学習プログラムを開発する。 ・生徒有志による仙台藩白老元陣屋資料館でのボランティアガイドを継続的に発展させる。 ・名古屋外国語大学や北海学園札幌高校など、他校と連携した学習プログラムに取り組む。

(令和5年度北海道 CLASS プロジェクト実施計画書 北海道白老東高校)

令和3年度開始時は、3年間で段階的に地域課題の「把握」→「探究」→「解決」を進めていき、カリキュラムを完成させていくという形の目標であったが、令和5年度の目標は、より体制構築を進めるものとなっている。これは、地学協働の取組や日常的な生徒指導・進路指導により、高校が大きく変わってきたという地域の評価を受けていることを踏まえ、地域 Co 配置がなくなった後も積み上げてきた地学協働を継続していく体制づくりが重要であると考え、大きな力点を置いたことを示している。

白老東高校では「高等学校 OPEN プロジェクト」を含め、長い間「地域学」を進めてきたが、地域 Co 配置による本事業で地域との関係がよりよい方向に変わってきていると捉えており、その良さを停滞させないため「Co 機能の維持」のために一つの方策を出している。

具体的には、校内委員会の発足とコンソーシアムによる実効的バックアップ体制づくりにより、Co 機能を確保していこうという試みである。白老東高校の地域 Co の職務は、2年目の計画書にもあるとおり、「学校と地域の連携にとどまらず、授業への参加すること」で学校支援だけでなく、「協働」に必要な機能を果たしているため大きな仕事量がある。校内体制とコンソーシアムでこの機能を十分に担っていけるかは、今後を見ていく必要がある。

③推進体制

上記のとおり、3年目の目標が体制構築になってきたことを見ても、推進体制を整備することは、地学協働推進上、極めて重要な要素であると考えられる。白老東高校については、本事業の前身である「高等学校 OPEN プロジェクト」でも「地域学」を実践しているが、本事業での「地域 Co 配置」により、地域のつながりに広がりが出てきて、活動が活発に行われるようになり、地域からも高校に対する理解や評価の声が聞かれるようになった。

3年目の主な推進体制は、学校全体で継続的に地学協働を推進する体制をめざすための「地学協働推進委員会」と「コンソーシアム」、配置されている「地域 Co」である。本事業の影響を受け、町教育委員会でも高校への専任ではないが、新たに Co を配置する動きが出ており、町全体の地学協働を推進する地域側の Co 機能が確保される状況になった。

こうした推進体制を持続可能なものとするために、3年間を見通した探究学習プログラムを開発し、主担当の教職員が異動しても活動が保たれるように工夫している。

（ア）地域コーディネーター

白老東高校における「地域 Co」は、実施当初、町教育委員会に派遣されていた道教委の社会教育主事が暫定的に担い、適任者が見つかり次第、徐々に業務を移行していく形で進められた。派遣社会教育主事には任期があるため、継続的に役割を果たすことができないことが分かっていることもあり、地域住民が担う方向で人選が進められた。

地域 Co には白老町議会の若手議員である佐藤 Co に白羽の矢が立った。佐藤 Co は、白老町出身で進学等のために一時、町外に出ていたが、故郷・白老町の知名度の低さを痛感し、YouTube 等で白老町の情報発信をしていた。そうした故郷のまちづくりにかける強い思いから、町議会議員となり、まちづくりを進めている実践家である。

町議会議員の性質上、地域に幅広い人脈をもっており、そのつながりにより、学校の地域との活動の幅が大きく広がったのは間違いない。地域 Co が関わる前の「地域学」でのつながりだけで総合的な探究の時間を行っていたとすれば、担当の教職員の構想内で完結するような活動におさまり、生徒の主体的な活動が展開できなかつたことも考えられる。3年目に学校長に行った聞き取り調査においても、「地域 Co 配置により、地域での探究のスタートを切れた」という声が聞かれている。

佐藤 Co が学校に入ってきたのは、1年目の7月である。「高等学校 OPEN プロジェクト」を経験していたとはいえ、外部人材が年度途中から入ってくることへの教職員の理解が難しいところもあったが、佐藤 Co は、商店街等のフィールドワークのために、自分のつながりを活かして地域の人々に協力を仰ぐ連絡に奔走した。佐藤 Co のそうした真摯な向き合いや、地域との活動による生徒の意識変容をみて、少しずつ地学協働への意識が変わってきた教職員もいた。

例えば、ある教職員は、普段授業では全然やる気がない生徒が地域探究の中で、映像づくりを行う活動に一生懸命取り組む姿を見て、「感動した」と話していたという。このほかにも就職試験で久しぶりに役場に合格する生徒が出てくるなど、生徒の進路実現にも好影響を及ぼしている。こうした活動や成果の積み重ねが佐藤 Co への教職員の意識変容につながってきた。

2年目には、佐藤 Co への相談や協力依頼が増加し、授業計画や企画へ参加するようになった。地域を知る地域 Co が企画に参加することで「こんな活動もできる」という学校だけで考えつかない活動も計画できるようになる。こうして、学校・地域 Co が関わりながら活動を進めることで、地域学校協働活動が活発に実施された。地域との活動機会が増えると、生徒と地域の人とのつながりもできてきて、

生徒の中には、地域活動に参加（元陣屋資料館ボランティアガイド等：後述）する生徒が出てきた。

地域からも「白老東高校がいい意味で変わってきた」という声が聞かれるなど、教職員の生徒指導や進路指導、地学協働により、学校と地域の相互理解が進むことで「地域とともにある学校」に近づいた学校経営がなされるようになってきた。

学校長への聞き取りによると、「地域からの苦情が減り、地域 Co をとおして地域の評価が見て取れるようになった」と述べており、地学協働の副次的な効果が現れている。地域 Co の働きの一つに学校と地域の声の橋渡し役になれるということもある。地域 Co のつながりで地域のリアルなニーズや評価が学校に届くことは、地域とともにある学校づくりにとって大きな情報であり、学校の情報が地域に伝わることで地域における学校の魅力や価値が高まることにつながる。

地域 Co 配置が、生徒の主体的な探究を進める「きっかけ」になるとともに、学校が地域人材とつながる範囲を大きく広げることになったことは確かだろう。地域人材と学校の間には、地域 Co を含めた様々な「人」と「人」のつながりからできてくることであるが、異動がある教職員だけでは、浅いつながりから深化させていくことは難しい。生徒の主体的な探究を支えるための様々な地域人材とつながりを持つためには、地域をよく知る Co 機能があることが重要な要素となる。

（イ）コンソーシアム

今までの取組の積み上げがあるので、コンソーシアムについても概ね活動に関わっていた団体を中心に構成した。具体的には、町長をはじめとして、産業経済課、アイヌ政策推進室、生涯学習課の町役場・町教育委員会の行政関係者や商工会、青年会議所、観光協会、アイヌ協会、ウポポイの関係団体、PTA、道教委、高校関係者、地域 Co 等となっている。

コンソーシアム構成員への説明は、地域 Co と連携して学校が直接趣旨の説明を行い、参画することに同意してもらっている。初年度は、立ち上げの会議を実施し、改めて趣旨説明を行っている。

2年目には、組織としての位置付けを明確にするために規約を整え、連携のある「名古屋外国語大学」や元陣屋資料館等の活動関係者を追加するなど、構成を見直し、学習を実際にバックアップする体制づくりを進めた。名古屋外国語大学とは「高大教育連携協定」を結ぶなどつながりを深めており、今後も様々な活動での協働が期待できる。

このように、コンソーシアムは、当初から関係者での構成で進んでいるが、前述のとおり、地域 Co 配置がなくなってからの地学協働推進体制において、コンソーシアムも Co 機能を含めた大きな役割の一端を担うことになってくると思われるので、より実働性・当事者意識の醸成が問われてくる。委員が多くの活動に関わりながら、参加から参画へのステップを意識した関わりが重要になってくる。本事業終了後も、佐藤 Co がコンソーシアム構成員として活動に継続的に関わることで、これまでの体制・Co 機能の維持を図っていく。

（ウ）学校の体制

管理職は、「地域との協働は、今の学校においてやらなければならないことだ」という理解をしているが教職員の理解は難しいところもある。白老東高校の場合、「高等学校 OPEN プロジェクト」の素地があるので選択科目の「地域学」を進める体制はできている。その体制を一步進めて、全学年の「総合的な探究の時間」として学校全体が関わりをもつ位置付けに変えていくことが必要であった。

生徒たちが地域に出て行くということは危機管理も伴うので、多くの教職員が関わりを持つ必要があるが、選択科目の「地域学」には関わりがないと思っている教職員も多くいた。

担当の志田教諭は、白老町出身で地域のボランティアも行っている「郷土愛」を持った教職員だ。そのため、主体的・積極的に取組を進めており、地域との関わり楽しさも理解している。こうした、主体性を持った担当の教職員の存在は、活動を推進していく上で非常に重要な存在である。「人」で左右されないように組織としての体制構築を行う側面はあるのだが、実際のところ、こういうキーパーソンになる存在は、地域学校協働活動のような労力や創造性が必要となる活動を推進する上で不可欠である。それが地域 Co の場合もあるが、学校の担当教員に意識や熱意があると、学校の体制として物事を円滑に進める大きな力となる。

志田教諭がボランティアで参加している元陣屋資料館に、生徒の中からもボランティアガイドとして参加する状況がでてきた。これは、志田教諭の影響もあるが、地域の人との関わりが多くなってきて、生徒が主体的に「地域活動へ参加したい」、「自分も地域に貢献したい」、という「地域人」として目指すべき意識を持つ生徒が出てきてことを示している。担当や地域 Co を含めた学校の体制整備が進み、地域での活動が増えることで起こってくる成果であることは間違いない。

実際には、本プロジェクト 2 年目に全学年の「総合的な探究の時間」での実施に転換し、地域との関わりが大きく増加したことが、様々な成果につながっている。

3 年目には、学校体制として地学協働推進委員会を設置し、コンソーシアムとともに、持続可能な体制づくりを進めるべく動き出している。学年間で取組を共有し、引き継がれていくことで担当者が異動したとしても、取組は継続できるようにする仕組み作りである。

こうして、白老東高校の体制構築が進み、活動の広がりとともに生徒や地域の意識変容など、様々な変容が起きている。まさに、地学協働で想定される成果を実現していると言える。

④活動

白老東高校の探究では、ウポポイを活用したアイヌ文化や民族共生への理解や元陣屋資料館を含めた地域の歴史についての学習が一つの軸になる活動となる。

令和 3 年は、ウポポイとの連携で見学やムックリ製作の体験活動のほか、アイヌ文化を紹介する動画を作成するなど、主体的で体験的な学びをとおして理解を深める活動を行った。

この他にもウポポイを訪れる観光客は、あまり町の商店街に立ち寄らない状況があることから、連携している名古屋外国語大学から、フィールドワークについてのレクチャーを受けた後、大学生とともに商店街へのフィールドワークを行い、町内の大人たちとの対話をとおして、商店街の魅力を探る活動を実施した。町民との対話やそれを元にした CM づくりにより、地域の活動をしている大人の姿を見て、自分たちが地域のために実際に活動できたことにより、自己肯定感や自己有用感が高まる様子が見られた。



↑ 商店街でのインタビュー。意欲的に取り組む生徒も多い。

こうした地域での活動や大人たちとの対話が、生徒の社会への意識を変え、振り返りの活動で自分たちが「社会で役に立つ」疑似体験を内省することで社会参画意識を育むことができた。

こうして、社会参画意識を高めるとともに、地域からも高校生の活動が認知されるようになってくると、声かけにより主体的な地域活動を実践する生徒が出てくるように

なる。元陣屋資料館でのボランティアガイドなどがその好例で、高校生が地元の資料館のボランティアガイドに関わるようになっていく。

元陣屋資料館には、志田教諭も参加している「友の会」があり、来館者に解説するなどのボランティ

ア活動を行っている。この友の会に参加する生徒が数名出てきて、ボランティアガイドや蛍の観察会の運営など、地域活動に主体的・積極的に関わる様子が出てきた。

こうした地域活動に高校生のうちから参加する経験をしていれば、社会人になってからも地域活動に抵抗なく関わるができるようになる。地域活動の楽しさを体感し、地域の大人との関わりをもつ高校生の活動は、地元の新聞にも何度も取り上げられ、地域でも高校生の活動を応援する声が出てくるなど、活動が活発に行われるスパイラルができてきている。



↑ 元陣屋資料館での解説ボランティア。生徒が自主的に参画している。

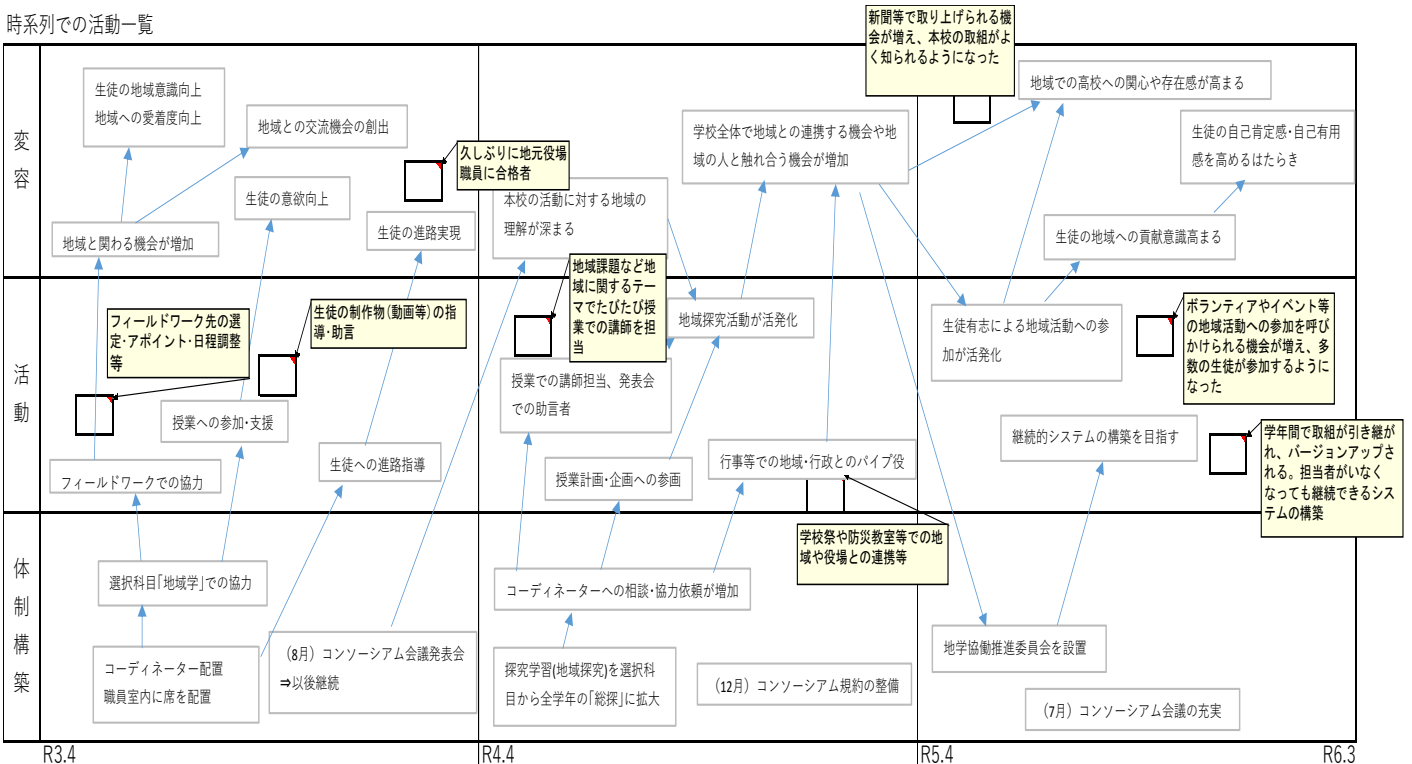
実際に、高校生がガイドをすると来館者は真剣に耳を傾けるし、高校生にとっても、褒められ、人前で話すことに慣れてくることで、自己肯定感やコミュニケーションスキルの向上といった具体的な成果が出てきている。課外活動も含め、地域での活動で生徒の社会的な資質が育まれていくことは、地域学校協働活動の大きな成果であると言える。

このように、活動について効果や成果も含めて記載をしてきたが、学校が校長のリーダーシップの元、地域を知る地域 Co と教育の専門家である教職員が同じ方向を向いて活動を進めたときの生徒や地域に与えるインパクトは相当なものがある。

⑤変容

高校から3年間の活動とその影響を時系列でまとめたものを以下のとおり示していただいたので、それに基づき考察する。

時系列での活動一覧



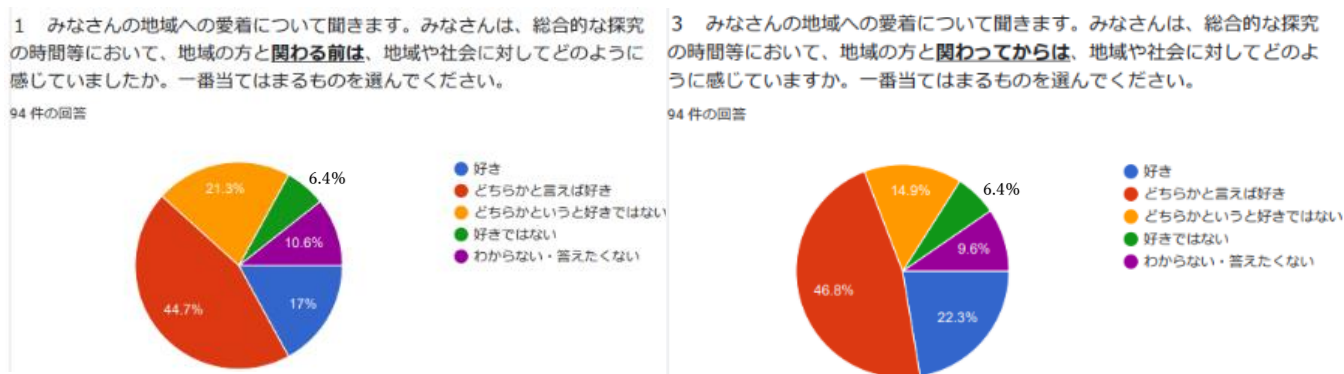
(令和5年度 北海道白老東高校)

- ・「地域 Co 配置」からフィールドワーク等の「地域での活動」が行われ、「生徒の地域意識・意欲が向上」する変容が起こった。
- ・地域 Co により、学校と地域の既存のつながりに止まらない連携先ができた。
- ・地域 Co の進路指導が生徒の進路実現（久しぶりに白老町役場に合格）につながった。

- ・コンソーシアムを活用して、地域の学校理解が深まることで地域のさらなる活動協力が得られるようになった。それにより地域学校協働活動が活発になり、学校への理解促進につながるというプラスのスパイラルがまわりはじめた。
- ・地元の新聞等による活動についての報道も地域の学校理解を深めた。
- ・地域学校協働活動が活発になることで、生徒と地域の人々がふれあう機会が増え、そのつながりにより生徒有志が地域活動に参加するようになった。これにより、生徒の地域への貢献意識、自己有用感・自己肯定感が高まるとともに、地域の学校理解が促進された。

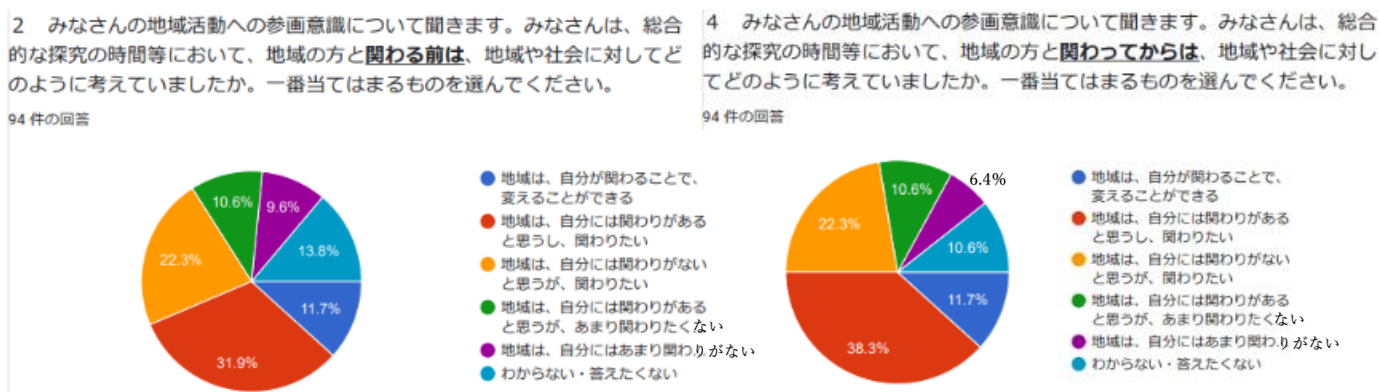
また、地域活動について、地域学校協働活動実施後の生徒にアンケートをとっている。実施後に実施前の自分を振り返って比較してもらった。質問の1と3は、「地域についての愛着」、2と4は、「地域活動への参画意識」について聞いたもので、結果は、以下のとおりとなっている。

< 1 は地域学校協働活動実施前、3 は地域学校協働活動実施後の地域への愛着について >



「好き」「どちらかと言えば好き」を合わせると、
 (事業前) 61.7% (58人) → (事業後) 69.1% (65人)
 となり、地域に愛着をもつ生徒は増えている。

< 2 は地域学校協働活動実施前、4 は地域学校協働活動実施後の地域活動への参画意識について >



「地域は自分が関わることで変えることができる」と答えた生徒は、
 (事業前) 11.7% (11人) → (事業後) 11.7% (11人)
 「地域が自分に関わりがあるかないかは別にして、地域に関わりたい」と答えた生徒は、
 (事業前) 54.2% (51人) → (事業後) 60.6% (57人)

となり、地域と関わることで地域を変えられると考えている生徒数は変わらないが、地域に関わりを持ちたいと考える生徒は増えている。

＜総合的な探究の時間をとおして、どのような点が成長したと思うか。（複数回答）＞（回答数 94）

1 社会の仕組みについて知ることができた	39
3 探究することの意味を理解できた	36
8 他の人の意見を尊重できた	35
2 調べたことを使う力が身についた	32
6 集めた情報を整理することができた	32
5 課題解決のための情報を集めることができた	30
12 よりよい社会づくりに貢献したいと思った	26
10 課題解決のために、他の人と協力できた	24
4 課題を見つけることができた	23
7 集めた情報をまとめたり、表現することができた	18
11 自分の生き方と社会の関係について考えた	12
9 自分から課題解決に努力できた	9
13 わからない・答えたくない	10

＜総合的な探究の時間をとおして成長したきっかけは何だと思えますか（自由記述）から一部抜粋＞

- 苦勞して地域のために貢献した
- 自分から行動することで解決することが多い
- 地域活動で得た知識や経験
- みんなとの会話
- 自分が住んでいるところだから、恩返しではないが貢献したいと思ったから
- 地域を知ることができた

（令和5年度 北海道白老東高校 生徒へのアンケート調査）

アンケートからの考察

- ・生徒自身が、地域に関する探究をとおして、人や地域と関わり、地域への愛着、地域社会への参画意識を高めた。
- ・地域との関わりや探究の主體的な取組が、自分を成長させていると感じている生徒もいる。
- ・生徒が成長した点として「社会の仕組みについて知ることができた」が一番多い回答となっており、地域探究により、地域社会について学ぶことで「社会」の仕組みを学ぶ機会となった。

⑥3年間のまとめ

＜成果＞

- ・「文化財」という地域特有のコンテンツの活用は、地元外からの生徒が多くても地域への愛着や社会参画意識を育成することにつながる
- ・地域 Co 配置により、地域との多様なつながりができたことで「探究」の素地ができた
- ・Co 機能の維持について、コンソーシアムで担う形で展開（地域 Co がコンソーシアムに残る）
- ・地域 Co は、地域の声を高校に届ける機能も果たしていた

- ・活動により地域の高校への理解が深まり、さらなる協力・理解促進という「プラスのスパイラル」ができてきた
- ・生徒有志の地域活動への参画から、生徒の地域への貢献意識の向上、自己有用感・自己肯定感の高揚などの成果が見られた
- ・地域学校協働活動により生徒・関わった地域協力者の意識が変容するとともに、活動を地元新聞が報道することにより、地域の高校理解が深まり、苦情が減り、高校や生徒を評価する声が高校に届くようになった
- ・地域理解が深まると、行政や議会でも高校生の活発な活動が話題になるなど、地域での高校の存在感が高まった
- ・白老町役場に採用される卒業生が出るなど、生徒の進路実現にもつながった
- ・生徒が探究をとおして社会の仕組みを学ぶ機会となった

<課題>

- ・外部人材の予定により、学校の予定を変更しなければならないこともある
- ・地域人材によっては、謝金が必要なこともあるので、フィールドワークでの移動に関することも含めた活動の予算が必要
- ・学校全体のこととして進めていくためには、主体性・創造性を持った担当教員が必要
- ・学年間のギャップが生じないように進めていく必要がある
- ・社会と関わる礼儀等の土台となる指導が必要
- ・地域連携の業務量が大きいため、一定の教員数の確保や教員の主体性が必要
- ・校外に出て行く上での安全対策が必要

⑦資料（資料編に掲載）

- 白 1 令和3年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（1年次）《第1次》
- 白 2 令和3年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（1年次）《第2次》
- 白 3 令和3年度 北海道 CLASS プロジェクト実施報告書（1年次）
- 白 4 令和4年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（2年次）
- 白 5 令和4年度 北海道 CLASS プロジェクト実施成果報告書（2年次）
- 白 6 令和5年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（3年次）
- 白 7 全道地学協働活動研究大会発表資料
- 白 8 令和5年度 北海道 CLASS プロジェクト実施成果報告書（3年次）